

➡ 日比谷高校がGE-NET 20の指定を受けました

「東京グローバル人材育成指針」に基づく先進的な取組を推進する学校(Global Education Network 20)として、東京都教育委員会より令和4年4月1日より3年間の指定を受けました。

Global Education Network 20 (以下GE-NET 20 ジーネット・トゥウェンティ) では、日比谷高校がTokyo Global 10 事業において充実させてきた英語教育や国際交流事業をさらに進化させていきます。

具体的には、SDGsなどの地球規模の課題に対して取組む探究的な学びを、SSH事業と連携して充実させていく他、高い語学力を獲得するために主体的に英語を学ぶ姿勢の育成、グローバル市民の一員として自覚と多文化共生の精神の涵養などに取組みます。

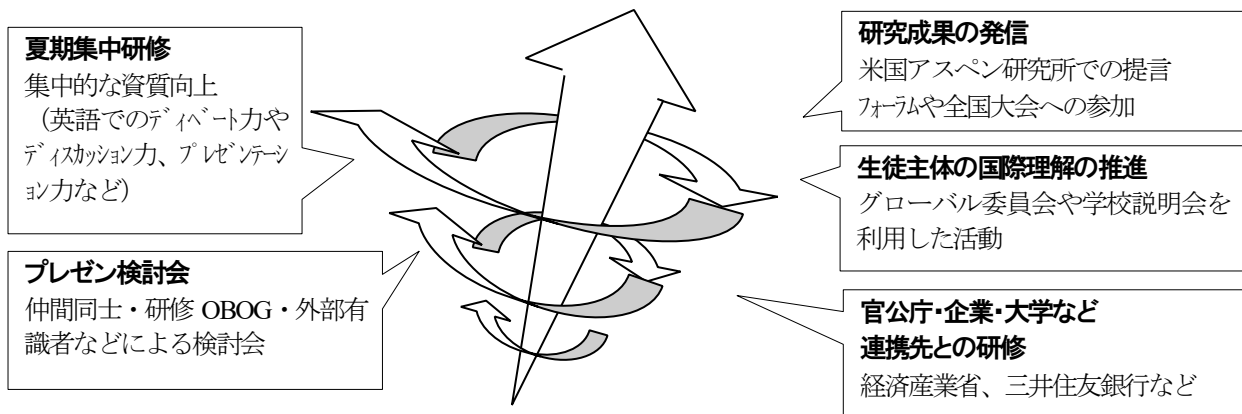
➡ 令和4年度「グローバルリーダー育成研修」が始まりました

GE-NET 20 事業の主要プログラムの1つである「グローバルリーダー研修」が始まりました。

今年度は2年生の希望者 10 名の生徒が参加します。生徒たちは昨年度末に応募課題を受け取り、4月に提出課題と面接による選考を経て参加が決定しました。

2グループに分かれた生徒たちは、この研修を通して、グローバル課題である「食糧問題」について提言を作成します。提言は英語で作成し、最終的にニューヨークのアспен研究所というシンクタンクに向けて発表します。研修は、提言を作成するための事前研修・発表・成果報告などの事後研修から成ります。

【グローバルリーダー育成研修の概要】スパイラルスキルアップのイメージ



「グローバルリーダー育成研修」は、従来は「グローバルリーダー育成海外派遣研修『ボストン・ニューヨーク研修』と「ニュージーランド姉妹校研修」として、海外派遣研修を含む形で実施されていたものです。今年度もパンデミックの影響で海外派遣研修は実施できませんが、「海外研修」の代わりに4日間の「夏期集中研修」を盛り込んだ内容で研修を実施していきます。研修の成果をGlobal Journalを通してお知らせしますので、ぜひご確認ください。

➡ 4/19(火) 8・9限「理数探究基礎」：「ライフサイクルアセスメントでリサイクルを探究する」

東大先端科学技術研究センター教授 平尾雅彦教授

先述の「グローバルリーダー研修」参加者と「SSH探究基礎II」履修者の計20名が、「研究は何のために行うのか？」を学ぶために、1学年の「理数探究基礎」のオリエンテーションに参加させていただきました。

平尾先生は、「環境を良くするために、人をどのように動かすことができるか？」を研究テーマとしていらっしゃいます。

プラスチック処理の方法としてのリサイクルにはさまざまな方法があります。その中で、平尾先生はこんな問いを立てました。



「リサイクルさえしていれば、良いのだろうか」

そこで、リサイクルの効果として評価すべき項目を洗い出し、比較研究をした結果、「燃やすならば、リサイクルした方が環境に良い」という結論に至ったそうです。

他に、「ペットボトル水と水道水のどちらを飲むのが環境によいか?」、「エコバッグとレジ袋はどちらが環境負荷が低いかな?」などのアセスメントもされているそうです。

好きなこと、気になることを突き詰めた結果が「研究」になったということですが、好奇心旺盛で、気になったものはどんどん調べて自分で試してみる先生の人柄がよく伝わる講演でした。

<<参加生徒の感想から>>

・専門家と呼ばれる先生方は何か一つのことに的を絞っての研究をされていると思っていたが、その真逆であったことに驚いた。先生の研究範囲が環境という多様な要素が複雑に絡み合ったものだからかもしれないが、広い範囲に及ぶ経験こそ発想力を形作るのかもしれないと思った。

・今年の研修の中で向き合っていく食料問題の解決というテーマは様々な分野の課題が複雑に絡み合ったものであり、この研修会で学んだことが直接的に関わってくるように感じられた。特に私個人としては文系志望であるが、自分の専門分野にとらわれず、広い視野を持って問題と向き合い、多角的に解決の糸口を探す思考を持つ必要があると気付かされた。

➡ 5月11日(水)8・9限 「日本の農業」

本校地理科・新堀毅教諭による講義を実施しました

グローバルリーダー研修のメンバーに対して、提言作成に向けた事前研修をしていただきました。タイトルこそ「日本の農業」ですが、昨今のウクライナ侵攻を踏まえてグローバルな視点から「食」の問題をどう考えるべきか、示唆に富んだお話を頂きました。

日本を中心に、世界が抱える様々な課題を網羅的に講義していただいたので、これから提言を作成していく際に、そうした社会的な問題を視野に入れながら活動していくことができるでしょう。メンバーたちは大きな刺激を受け、講義が終わっても質問が止まりませんでした。



<<新堀先生からのメッセージ>>

「日本の首都・東京の、都心のど真ん中に位置する我が校が、敢えて「農業」をテーマとする理由。それは、我が国にとって本当に重要なはずの「食の安全保障」の問題を、都市生活者として、傍観者のようにこのままやりすごしていいのか、という問題意識からである。日本是世界の中でも温暖多雨で農業に適した環境であり、極めて肥沃な土壌に恵まれた豊かな大地を持つ。その上、農耕具や化学肥料の生産、品種改良など農業に関わる高い技術も有する。日本はもっと農業を成長産業として捉え、どのような取組みが可能か考えるべきではないか。そして、世界各地の抱える食の問題と関わっていくべきではないだろうか。

今般のウクライナ危機を考え合わせても、食の自給を目指す方向を考えるべきだと感じるかどうか、聞きたい。」



<<参加生徒の感想から>>

・新堀先生の食料自給率を上げるべきという話は発展途上国における食糧支援と繋がってように感じた。もちろん、フードバンク等の寄付は大事だが、各国、個人の自立には繋がらないし、一時的な解決になってしまうと思う。いずれは支援なしに食料確保ができるような体制作りの手助けをしたい。

・日本の農業のあるべき姿やどうなっていくのか、という問いは非

常に興味深かった。現状日本では食料自給率が低空飛行を続け、我々が口にする食糧の多くを輸入に頼っている。農業人口の減少に加え、個人経営の農家が多いために新しい技術を活用することも難しいようである。しかし、ゆくゆくは機械化、大規模化が進み、日本の食料自給率も一定以上に安定させなければならない。これは既存の農家からすると脅威かもしれないが、我々からすればチャンスであるかもしれない。この国を変えてやる、という意識が今我々若い世代に求められている。

・今まで、自分の考えていることを率直に話したり、質問したりする機会がなかったので、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができた。ただ自分で調べ情報を収集したり考えたりしている時よりも、対話では新たな疑問や考えが生まれやすかった。

➡ 現在案内中の各種イベント

◎ 2022 日韓交流作文コンテスト 主催：駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院・東京韓国教育院

応募締め切り：2022年8月21日(日)必着

エッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記のカテゴリーのそれぞれに、日本語部門と韓国語部門があります。

※ テーマなどの詳細は校内掲示を見るか、グローバル事業部（石河）に問い合わせてください。

駐日韓国文化院のwebでも詳細が確認できます。

https://www.koreanculture.jp/info_news_view.php?number=7174&cate=14

◎ 第14回 IIBC 高校生英語エッセイコンテスト 主催：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

応募期間：2022年6月1日(水)～9月2日(金)

テーマ：「身近な異文化体験～コミュニケーションを通じた響きあい～」

英語によるエッセイ 501語以上700語未満（1校2作品まで）

※すべての応募作品にネイティブスピーカーのコメントをつけてフィードバックあり

※ 学校単位の応募です。応募を考えている人は、グローバル事業部（石河）まで申し出てください。

<https://www.iibc-global.org/iibc/press/2022/p191.html>

◎ 高校生と大学生のための金曜特別講座

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部主催のオンライン講座で、日比谷高校の生徒ならば誰でも、事前申し込みなしで受講できます。

Teamsの「日比谷」チャンネルにURLが配信されます。第一線で活躍する研究者たちが、将来を担う世代に向けて行方力の入った講義を聴くことができます。冒頭で各先生がどのように進路を選択してきたかを話してくださるので、進路選択の参考にもなるでしょう。貴重なリソースです。ぜひ、積極的に活用してください。

<http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/>

※大学のwebsiteへは右のQRコードから行くことができます。



◎ 第5回 農学部オンライン公開セミナー「食品ロスを考える」

5月21日(土) 13:30～16:30 主催：東京大学大学院農学部生命科学研究科・農学部

※事前登録が必要です

詳細・参加申し込み <https://www.a.u-tokyo.ac.jp/seminar/> (右のQRコードからも可能)



➡ その他

○ 首都圏公立校長会主催：スタンフォード大学次世代リーダー養成プログラム

→本校から、2年生2名、1年生9名が応募し、参加が決まりました。